

【旧約聖書日課】ホセア書 14章2～8節

2 イスラエルよ、立ち帰れ

あなたの神、主のもとへ。

あなたは咎につまずき、悪の中にいる。

3 誓いの言葉を携え

主に立ち帰って言え。

「すべての悪を取り去り

恵みをお与えください。

この唇をもって誓ったことを果たします。

4 アッシリアはわたしたちの救いではありません。

わたしたちはもはや軍馬に乗りません。

自分の手が造ったものを

再びわたしたちの神とは呼びません。

親を失った者は

あなたにこそ憐れみを見いだします。」

5 わたしは背く彼らをいやし

喜んで彼らを愛する。

まことに、わたしの怒りは彼らを離れ去った。

6 露のようにわたしはイスラエルに臨み

彼はゆりのように花咲き

レバノンの杉のように根を張る。

7 その若枝は広がり

オリーブのように美しく

レバノンの杉のように香る。

8 その陰に宿る人々は再び

麦のように育ち

ぶどうのように花咲く。

彼はレバノンのぶどう酒のようにたたえられる。

【使徒書日課】使徒言行録 9章36～43節

<sup>36</sup>ヤッファにタビタ——訳して言えばドルカス、すなわち「かもしか」——と呼ばれる婦人の弟子がいた。彼女はたくさんの善い行いや施しをしていた。<sup>37</sup>ところが、そのころ病気になるまで死んだので、人々は遺体を清めて階上の部屋に安置した。<sup>38</sup>リタはヤッファに近かったので、弟子たちはベトロがリタにしていると聞いて、二人の人を送り、「急いでわたしたちのところへ来てください」と頼んだ。

<sup>39</sup>ベトロはそこをたって、その二人と一緒に出かけた。人々はベトロが到着すると、階上の部屋に案内した。やもめたちは皆そばに寄って来て、泣きながら、ドルカスが一緒にいたときに作ってくれた数々の下着や上着を見せた。<sup>40</sup>ベトロが皆を外に出し、ひざまずいて祈り、遺体に向かって、「タビタ、起きなさい」と言うと、彼女は目を開き、ベトロを見て起き上がった。<sup>41</sup>ベトロは彼女に手を貸して立たせた。そして、聖なる者たちとやもめたちを呼び、生き返ったタビタを見せた。<sup>42</sup>このことはヤッファ中に知れ渡り、多くの人が主を信じた。<sup>43</sup>ベトロ

はしばらくの間、ヤッファで革なめし職人のシモンという人の家に滞在した。

### 【福音書日課】ヨハネによる福音書 4章43～54節

<sup>43</sup>二日後、イエスはそのを出発して、ガリラヤへ行かれた。<sup>44</sup>イエスは自ら、「預言者は自分の故郷では敬われないものだ」とはっきり言われたことがある。<sup>45</sup>ガリラヤにお着きになると、ガリラヤの人たちはイエスを歓迎した。彼らも祭りに行ったので、そのときエルサレムでイエスがなされたことをすべて、見ていたからである。

<sup>46</sup>イエスは、再びガリラヤのカナに行かれた。そこは、前にイエスが水をぶどう酒に変えられた所である。さて、カファルナウムに王の役人がいて、その息子が病気であった。<sup>47</sup>この人は、イエスがユダヤからガリラヤに来られたと聞き、イエスのもとに行き、カファルナウムまで下って来て息子をいやして下さるように頼んだ。息子が死にかかっていたからである。<sup>48</sup>イエスは役人に、「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」と言われた。<sup>49</sup>役人は、「主よ、子供が死なないうちに、おいでください」と言った。<sup>50</sup>イエスは言われた。「帰りなさい。あなたの息子は生きる。」その人は、イエスの言われた言葉を信じて帰って行った。<sup>51</sup>ところが、下って行く途中、僕たちが迎えに来て、その子が生きていることを告げた。<sup>52</sup>そこで、息子の病気が良くなった時刻を尋ねると、僕たちは、「きのうの午後一時に熱が下がりました」と言った。<sup>53</sup>それは、イエスが「あなたの息子は生きる」と言われたのと同じ時刻であることを、この父親は知った。そして、彼もその家族もこぞって信じた。<sup>54</sup>これは、イエスがユダヤからガリラヤに来てなされた、二回目のしるしである。

### 「タビタ、起きなさい」【こども説教のために】

主イエスの弟子ペトロがリダの町にいたときのことです。

近くの町ヤッファの教会の二人が訪ねてきました。タビタが亡くなったという知らせでした。ドルカスとも呼ばれていた女性タビタは、主イエスの弟子となっていた人でした。主イエスに倣って善い行いや施しに励み、夫を亡くしたやもめたちのために下着や上着を作る奉仕もしていたので、教会の中だけでなく多くの人に知られていたのです。ところが、彼女は病気になり死んでしまいました。教会は、死んだ彼女の遺体を二階の部屋に寝かせ、別れを惜しみました。知らせを聞いてヤッファに来たペトロは、すぐにそこを訪ねました。皆、口々に、タビタが生きていたときのことを語って聞かせてくれます。そのとき、ペトロは、皆を部屋の外に出し、祈り始めました。主イエスがなされたことを思い出したのです。そして、タビタに向かって言いました、「タビタ、起きなさい」。すると、タビタは起き上がったのです。教会の人々は、再び、タビタの生きた姿を見ることになりました。

それは、主イエスがなさっていたことでした。死んだ人を、愛する者たちの間で永遠に生きる者としてくださったのです。主イエスご自身も、タビタも、弟子たちの教会の中で永遠に生き続けるのです。わたしたちも、主イエスやタビタの生き続ける教会で、永遠に生き続けるのです。

## 「来てください」

先主日に続いて今日も午後、わたしは、近隣教会の牧師就任式に出席する予定です。三週続きとなります。同じ東京教区北支区に属する教会で牧師就任式があると、招かれるのです。都合がつく限り、出席するようにしています。普段、特別に親しくしていない教会同士であっても、招かれて訪ねると歓迎されます。もっとも、牧師就任式には多くの来客が参列しますから、出席したからといって必ずしも挨拶をしたりするわけではないのです。紹介すらされないこともあります。それでも出席するのは、主イエスならばそうなさったろうと考えるからです。主イエスの弟子たちもそうさったろうと考えるからです。

ペトロがヤッファの教会に招かれたのは、急なことでした。タビタが亡くなったとき、たまたま近くの町に滞在していて、そのことが知れていたからでした。もっとも、ペトロは近々ヤッファに向かうつもりだったのかもしれませんが。ヤッファの教会に自分の訪問予定を伝えてあったからこそ、ペトロは、予定を早めて来てください、と求められることになったのでしょう。「**急いでわたしたちのところへ来てください**」。ペトロは、滞在していたリダでの予定を切り上げて、迎えに来た二人と共にヤッファに向かったのです。

それは、タビタの葬りの営みのための訪問でしたが、意義深いものになりました。弔問に訪れ、別れを惜んでいる人々の中で、ペトロは、タビタを起き上がらせたのです、「**タビタ、起きなさい**」と。

ペトロには刻まれた記憶があったのでしょうか。主イエスと共にナインという町を訪ねたとき、たまたま鉢合わせた死んだ若者の葬列に加わられて、主イエスは母親に「もう泣かなくともよい」（ルカ 7:13）と声をかけられ、そして告げられたのです、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」（同 7:14）。会堂長のヤイロが死にかけていた娘のために来てくださるようにと願ったときには、到着が遅れてすでに弔問の人々であふれていた家に入られて、主イエスは、横たえられた娘の手を取り、告げられたのです、「娘よ、起きなさい」（ルカ 8:54）。死んで横たえられたタビタを前にして、ペトロが告げられることは一つだけでした、「**タビタ、起きなさい**」。

ペトロは、死んだタビタをヤッファの教会の人々の中に取り戻させたのです。タビタの死は、タビタの終わりではない。永遠の別れではない。むしろ、タビタは死んだが、その命は、教会の人々の中に生き続けている。そのことを、ペトロは、教会の人々に思い起こさせたのでしょうか。

タビタのしてきた善い行いや施し、やもめたちのために尽くしてきたことは、確かにその名と共に教会の人々の間で受け継がれ、生き続けたはずです。わたしたちは、今も教会にタビタの姿を見つけるのです。

## 「帰りなさい」

主イエスのように評判が知れ渡ったお方は、遠方から「来てください」との求めが届くことも少なくなかったのでしょう。そのすべてには応じきれなかったのかもしれませんが。

主イエスがカナの町に滞在していたとき、カファルナウムの町からわざわざ訪ねてきたのは**王の役人**でした。この人は、他の福音書が百人隊長として伝えている人物のことだとも言われます。いずれにしても、社会的な地位もある人物です。自分より身分が上の方のところには、もちろん自ら出向いて行ったでしょう。しかし、そうでなければ、使いを送ることもできたはずで、それでも彼が自ら主イエスのもとに出向き、カファルナウムに来てほしいと求めたのは、自分の息子のためだったからです。病気で死にそうな息子のために、父親である彼は、藁にも縋る思いで、カナの町に滞在している主イエスを訪ねたのです。「**主よ、子供が死なないうちに、おいでください**」。

ところが、なぜか主イエスは、その父親を帰してしまわれました。自ら出向くことはなさらなかったのです。意外かもしれませんが、主イエスがそのような振る舞いをされたのは、一度だけではなかったようです。親友のラザロが危篤との知らせが届いたときも、主イエスは出立を遅らせ、ようやく訪ねたときにはラザロは死んでしまっていたのです（ヨハネ 11 章）。ラザロをすでに墓に葬り、なお遺族を慰めるために弔問に訪れていた人々からは、冷たい目で見られました。それでもおいでになられたのは、死んだラザロをその家族や友人たちの中に取り戻させるためでした。墓に葬られたラザロを呼び出されたのです。「ラザロ、出て来なさい」（同 11:43）。ラザロの死は、ラザロの終わりではなく、永遠の別れでもない。ラザロは死んだが、その命は、ラザロを愛した者たちの中に生き続けている。そのことをまざまざとお示しくださったとき、そこには、ペトロもいたのです。

「**帰りなさい。あなたの息子は生きる**」。主イエスは、王の役人にそう告げられました。死にかけている息子を父親に取り戻させたのです。死に行く者を愛する者たちに取り戻させてくださるお方は、愛する者たちを死に行く者のもとにお帰しになられるのです。

ヤッファの教会の人々からタビタの死を告げられたペトロは、祈って主に願ったかもしれませんが、「主よ、タビタのもとにおいでください」と。けれども、主は、ペトロをお遣わしになられました、「あなたが、タビタのもとに行きなさい。そこが、あなたの帰るべきところ、あなたが愛すべき者を取り戻すところなのだから」と。

死んだ者を起き上がらせてくださるお方は、わたしたちを帰るべきところに行かせてくださり、愛すべき者を取り戻させてくださるのです。